

基底と精緻化から見た複合語の分類：日本語複合動詞を中心に

著者	陳 奕廷
雑誌名	国立国語研究所論集
号	13
ページ	25-50
発行年	2017-07
URL	http://doi.org/10.15084/00001370

基底と精緻化から見た複合語の分類

——日本語複合動詞を中心に——

陳 奕廷

国立国語研究所 研究系 理論・対照研究領域 プロジェクト研究員

要旨

本研究は Langacker (2016) で提案された「基底 (Baseline)」と「精緻化 (Elaboration)」という概念に基づいて、複合語の新たな分類基準を提示するものである。具体的には、本研究は複合語には「並列関係」「概念付加」「概念操作」という3つのタイプがあることを主張し、日本語のV1-V2型複合動詞のデータをもとに、「主要部」「生起順序」「生産性」の面において、タイプごとに違いが見られることを示す。

基底と精緻化理論を用いることで、主要部を基底としてとらえることができる。「飛び跳ねる」のような並列関係型はV1とV2の両方が基底=主要部であり、「叩き壊す」のような概念付加型は空きスロットを持つV2が基底=主要部、「読み始める」のような概念操作型は精緻化を受けるV1が基底=主要部となる。生起順序の問題については、並列関係型は意味的・形態的に対等のものでないと成立できない。概念付加型は基底となる概念が何らかの概念的な空きスロットを持っている必要があり、付加物はそのスロットに適合するものでなければならない。概念操作型の場合、基底は概念操作の精緻化を受けられるものに限られる。複合動詞に見られる生起順序の制限はこのようなタイプごとに異なる制約によってできたものだと考えられる。概念操作型について、本研究では『国語研日本語ウェブコーパス』という超大規模コーパスを用いることで、その概念同士の相互結合可能性を明らかにする。また、統語的アスペクト複合動詞と語彙的アスペクト複合動詞に見られる違いについても、それが部門による違いではなく、意味的な違いであることを明らかにする。複合動詞の生産性については、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のデータに基づく分析で、並列関係型が生産性を持たないのに対し、概念付加型は低い生産性を持ち、概念操作型は比較的高い生産性を持つことを示す*。

キーワード：日本語複合動詞、基底と精緻化、主要部、生起順序、生産性

1. はじめに

「複合 (compounding)」とは2つ、またはそれ以上の語彙素 (lexeme) を結合させることで新たな語彙素を形成することである (Bauer 2003: 40)。複合によって作り出された語は「複合語」と呼ばれ、日本語の「粉雪」のようなN-N型や「結び目」のようなV-N型の複合名詞、「旅立つ」のようなN-V型や「持ち上げる」のようなV-V型の複合動詞など、様々なタイプが存在する。

本研究は Langacker (2016) が提案した「基底 (Baseline)」と「精緻化 (Elaboration)」という概念に基づいて、複合語の新たな分類基準を提示する。複合語をこの基準に基づいて分類することによって、具体的には次の3つの課題に取り組む。第一に、複合語の主要部を認定する新たな方法を提案する。第二に、複合語の生起順序を説明する理論モデルを構築する。第三に、複合語

* 本論文は第142回NINJALサロン(平成28年5月31日開催)で発表した内容を加筆修正したものである。発表の際、多くの方から有益なコメントを頂いたことに感謝の意を表したい。

の概念的な内部構造の違いから、その生産性の違いを説明する。これらの課題について、主に日本語複合動詞のデータから検証を行う。

まず、主要部の認定についてだが、影山（1989）によると、合成語及び句において、全体の品詞を決定する要素を「主要部」と呼ぶ。そして、複合語においては、ほとんどの場合、主要部は品詞だけでなく意味の中心にもなるという。しかし、2つの構成要素の品詞が同じである場合、この基準ではどちらが主要部であるのか明白でないケースがある。日本語複合動詞を例に説明すると、(1a)のように、品詞からでは区別できないが、意味的に見て、明らかにV2が主要部の場合もあるが、(1b)のように、V1とV2両方とも主要部として考えられる場合もある。

- (1) a. 口達者な太郎は先生を {言い負かした／*言った／負かした}。
 b. 子供が {泣き叫んでいる／泣いている／叫んでいる}。

さらに、(2)のように、複合動詞の全体の意味が個々の構成要素の本来の意味と異なっているため、どちらが意味の中心であるか判断しにくい場合がある。

- (2) お酒を飲みかける ≠ お酒を {飲む／かける}。

また、日本語複合名詞の場合は、右側の構成要素が主要部となるのだが、「理論構造」と「構造理論」のように、どちらの構成要素も主要部（下線部の要素）になれる例もあれば、「構造主義」と「*主義構造」のように、特定の構成要素しか主要部になれない例もある。このことは、たとえ主要部の位置が固定されていても、どの構成要素が主要部になれるのかは絶対的な基準で決められるものではなく、構成要素の概念間の相対関係によって決定されるものであることを示している。

次に、複合語の生起順序の問題についてだが、押し込んで入れるという意味を意図する「*押し込み入れる」が成立しないように、2つの動詞の組み合わせである複合動詞は通常さらにほかの動詞と複合することはできない。しかし、「寝-静まり-かえる」のように、一部ではそれが可能である。その場合は特定の生起順序に従う必要がある（例：「*寝-かえり-静まる」）。このような生起順序をどのように説明するのか、ということも問題になる。

最後に、複合語はそのタイプによって生産性が異なるという問題がある。日本語複合動詞を例に説明すると、「～始める」などのような生産的なタイプがある一方、「～開ける」のような非生産的なタイプもある。このような生産性の違いがなぜ生じるのか、ということが問題となる。

本研究では、まず2節で先行研究における複合語の分類法を取り上げ、その問題点を指摘する。3節でLangacker (2016) が提案した基底と精緻化の概念について説明し、それに基づく複合語の分類基準を提示する。4節ではこのような分類基準に基づいて具体的に分析していく。4.1節において、複合語の主要部が精緻化を受けたあとの構造に基づいて判断できることを示す。複合語の生起順序に関しては、4.2節でそれぞれのB/E構造(3.1で詳述)における異なる制限としてとらえ、タイプごとに説明する。特に概念操作型の複合動詞について、『国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)』を用いて、1つの基底に対して2つの概念操作を行う場合に、2つの概念操

作の生起順序が意味的な相性によって決まることを示す。4.3 節では、複合語の生産性について、まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』のデータに基づいて、日本語の複合動詞の頻度情報を収集する。それをもとに、Baayen (1992) で提案された生産性 *P* の概念を用いて実証的に分析する。最後に 5 節で本研究の結論と今後の課題を述べる。

2. 先行研究における複合語の分類

複合語全般の分類についての従来の研究は、主要部の有無を分類基準の中心に据えている Spencer (1991), Bauer (2001), Haspelmath (2002), Booij (2005) などが主流であった。近年では、Scalise & Bisetto (2009) が図 1 のように、複合語の包括的な分類を目指し、1) 構成要素の文法的な関係、2) 文法的な関係の下位分類、3) 主要部の有無、という 3 つのレベルに基づく分類法を提案している。

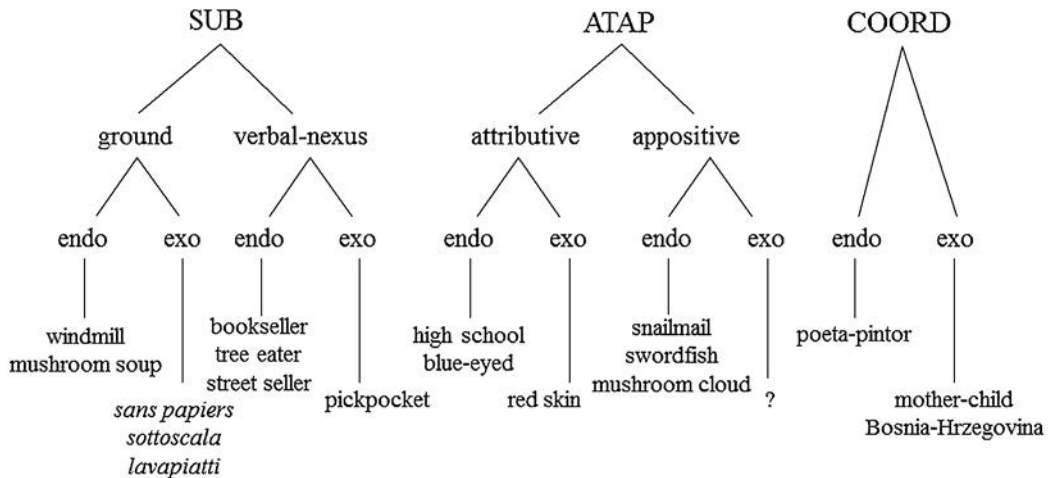


図 1 Scalise & Bisetto (2009: 50) における複合語の分類¹

それによると、複合語はまず、構成要素の文法的な関係に基づいて、従属型 (SUB)、修飾型 (ATAP)、そして並列型 (COORD) に分けられる。従属型の複合語においては、2 つの構成要素が主要部と補語の関係にある。たとえば、*taxi driver* という複合語においては、*taxi* は明らかに *driver* の補語であるという。修飾型の複合語は、主要部の名詞は非主要部によって修飾を受けるものである。たとえば、*blue cheese* の場合、非主要部の *blue* は主要部の *cheese* の属性の 1 つを表している。*painter-poet* のようなものは、並列型の複合語であるとされ、この場合、2 つの構成要素は *and* という意味関係で結ばれるものである。2 つ目のレベルでは、従属型と修飾型の複合語がさらに下位分類される。従属型は、主要部が動詞由来のものかどうかによって、*verbal-nexus*

¹ 図 1 における ? の部分はデータベースでは得られなかったもので、たとえば中国語の“人蛇 *rén shé*” (people snake) ‘illegal immigrant’ が相当するという。

と ground に分けられる。修飾型の場合は, attributive と appositive に下位分類される。Attributive の場合は *high school* のように, 主要部を非主要部の形容詞が修飾しているもので, appositive の場合は *mushroom cloud* のように, 主要部を非主要部の形容詞以外の名詞や動詞が修飾しているものである。このように下位分類された複合語はさらに主要部の有無 (内心構造 endocentric か外心構造 exocentric か) によって区別される。

この分類で問題になるのは, 複合名詞を中心に考えているところにある。Scalise & Bisetto (2009) はこの分類法について, 複合名詞以外のタイプの複合語にも適用されると考えているようだが, 実際の分析に用いている例はほとんどが複合名詞である。複合語, 特に V-V 型の複合動詞の中には, この分類法ではとらえられないタイプが存在する。この分類では複合動詞の例を挙げないため, 実際にどのように分類されるのかは不明だが, たとえば「読み始める」と「叩き壊す」はこの分類法の定義に従うと, とともに従属型の verbal-nexus のタイプに属すると思われる。しかし, あとで見るように, 「読み始める」と「叩き壊す」はいくつもの異なる性質を有しているため, 別のタイプとして扱う必要がある。複合語の中には, 複合動詞の「読み始める」や複合名詞の「完全燃焼」のように, 形態的には確かに合成的であるが, 意味的には, 2つの概念の合成というよりは, 次節で述べるように, 1つの基底となる概念に対して, ある特定の概念操作が加わる, というように考えるべきものが多くある。

本研究は従来の複合語研究の合成的なアプローチから脱却して, 複合語の形成を基底に対する精緻化というプロセスでとらえる。

3. 基底と精緻化

3.1 Langacker (2016) における基底と精緻化

Langacker (2016) によると, 人間の言語と認知にかかわる様々な側面において, 非対称性が見られる。この非対称性は基底 (Baseline) と様々な次元とレベルにおける精緻化 (Elaboration) からとらえることができるという。基底 (B) とはすでに確立されたもの, 存在するもの, またはコントロール下にあるもので, ある種のプライオリティを有する。一方, 精緻化 (E) は添加・改造, または付加的な動的プロセスを含む操作である。基底と精緻化によって, 層 (S) が生じることで形成される構造は B/E 構造と呼ばれ, 多くの言語現象に見られる遍在的なものであるという。

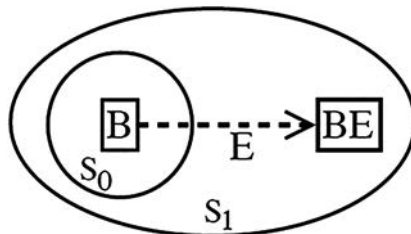


図2 B/E 構造 (Langacker 2015)

Langacker (2016) では基底と精緻化理論と従来の理論の違いについて、英語の複数形の例を挙げて説明している。それによると、従来の合成的なアプローチにおいて、英語の複数形は図3のように、*cat*の複数形は *cat + s* で *cats* になる、というような合成的なアプローチから分析されてきた。しかし、複数形の中には *goose* のように、その複数形が *geese* であり、単数形に別の要素を足してできたものではないものがある。そのため、従来の合成的なアプローチでは *geese* を、*goose* とプロセス形態素が合成してできたものだと考える。*Sheep* の場合も複数形は形態的に変化がないため、合成的なアプローチではゼロ形態素 (zero morpheme) のような、発音されないが、理論的に存在すると見なすものを設定する。それによって、複数形の *sheep* を単数形の *sheep* とゼロ形態素の合成としてとらえている。

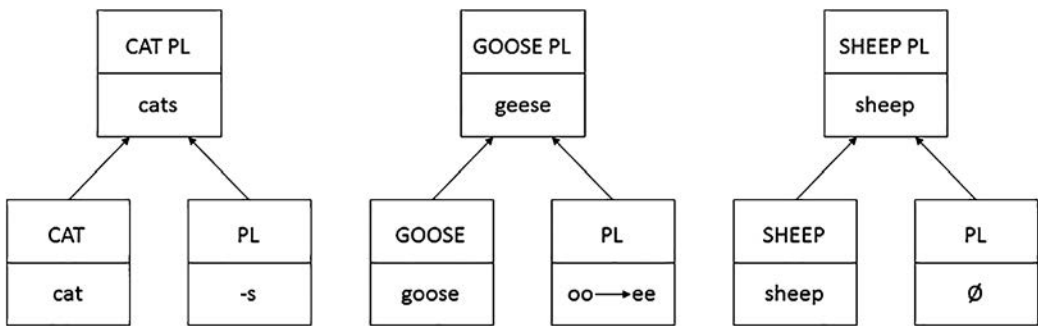


図3 合成的なアプローチにおける英語の複数形のとらえ方 (Langacker 2016: 418)

しかし、このようなゼロ形態素やプロセス形態素の心理的実在性を証明するものは何もない。

この問題に対して、基底と精緻化理論では英語の複数形の例は図4のように分析される (Langacker 2016: 419)。図4における四角の中で横線に区切られた上部は意味を表し、下部は形態を表している。ある基底が意味的に複数化 (PL) という精緻化を受ける場合、*cat* のように、形態的に *+s* されるものもあれば、*goose* のように *oo* が *ee* になるものもあり、*sheep* のように意味的な精緻化を受けても形態的な精緻化がない場合もある。

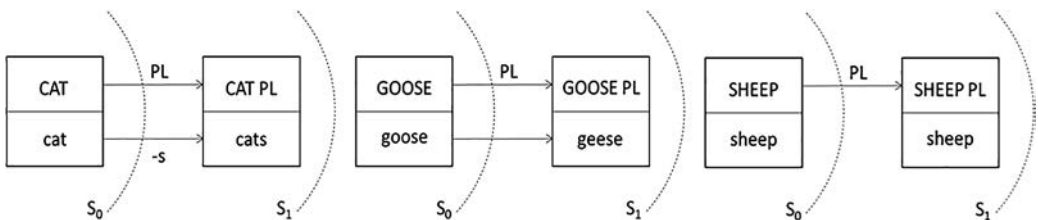


図4 基底と精緻化理論における英語の複数形のとらえ方 (Langacker 2016: 419)

このように、基底と精緻化理論は英語の複数形を要素の合成としてではなく、ある基底に対する精緻化としてとらえることができるため、存在が証明できないプロセス形態素やゼロ形態素を設定する必要がなくなる。

従来の研究において、形態論を構成要素の合成ではなく、構成要素に対して行うプロセスとしてとらえる考え方はすでに存在している (Sapir 1921, Hockett 1954, McCarthy 1981, Spencer 1998 など)。しかし、複合語については、それが形態的に2つの構成要素の足し算であることから、従来の研究においては、意味の面においても構成要素の合成として考えられてきた。それに対して、本研究は語形成を精緻化としてとらえることで、複合語の意味の面においても、基底の精緻化としてとらえる必要があることを示す。

3.2 精緻化のサブタイプとそれに基づく複合語の分類

本研究は B/E 構造をさらに発展させて複合語の研究に用いる。具体的には精緻化 (E) のタイプをさらに詳しく検討し、細分化する。そして、基底と精緻化以外に、付加物 (Additive) という概念を提案する。それによって複合語は図5のように、3つの異なるタイプに分けられる。aの並列合成型 (Coordination), bの概念付加型 (Augmentation), そしてcの概念操作型 (Adaptation) である。

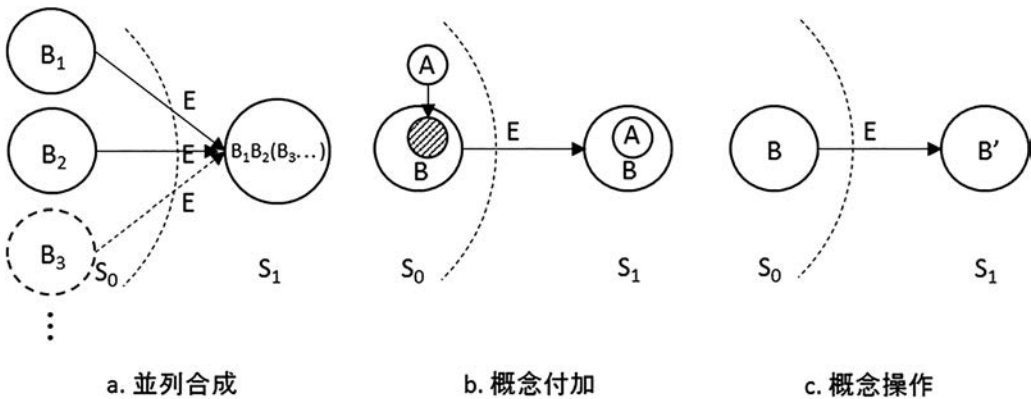


図5 本研究における概念的精緻化の細分化

まず、並列合成型についてだが、このタイプは (3) のように、2つ (またはそれ以上) の基底 (B) が並列合成という精緻化のプロセスを経て、1つの複合語になるもので、従来並列関係 (coordinate) と呼ばれていたものである。並列合成型の複合語においては、構成要素が全て基底となる。

- | | | |
|-----|---------------|---------------|
| (3) | 光り - 輝く | (B1-B2) |
| | 売り - 買い | (B1-B2) |
| | 松 - 竹 - 梅 | (B1-B2-B3) |
| | 東 - 西 - 南 - 北 | (B1-B2-B3-B4) |

並列合成のタイプは基底となるものが意味的・形態的に対称的なものでなければならないため、「光り輝く」や「飛び跳ねる」のような類義語の組み合わせや、「売り買い」、「上げ下げ」のような反義語の組み合わせに限られる。日本語の場合、並列関係の複合名詞は多く存在しているが、

複合動詞の例は少ない。特に、(4)のように、反義語の組み合わせは[V-V]_V型複合動詞にはなれず、[V-V]_N *suru* で表される。

- (4) 売り買いする *売り買う
 上げ下げする *上げ下げる
 出入りする *出入る

次に、概念付加のタイプは、基底が概念付加という精緻化の過程で、付加物 (A) を基底の空きスロットに埋め込むというもので、従来の修飾関係と従属関係のタイプが含まれる。概念付加型の複合語は (5) のように、その構成要素は基底 (B) と付加物である。

- (5) 切り - 倒す (A-B)
 黒 - ずきん (A-B)
 マッチ - 売り (A-B)
 旅 - 立つ (A-B)
 送 - 金 (B-A)

概念付加とは、基底の概念の中にある未指定の空きスロットに、意味的に適合する付加物の概念を埋め込むことであり、本質的に非対称的である。この観点において、Scalise & Bisetto (2009) における修飾関係と従属関係はともに概念付加として認められる。たとえば、「黒ずきん」の場合は、基底「ずきん」という概念における【色】という空きスロットに「黒」を埋め込んだものであり、ほかにも【材質】(「絹ずきん」や「ゴムずきん」)、【用途】(「防空ずきん」や「防災ずきん」)、【形状】(「袖ずきん」や「垂れずきん」)などの空きスロットがある。同じように、「送金」も基底「送」という概念における【送る物】という空きスロットに「金」を埋め込んだものである。ほかにも【送る方法】(「郵送」や「陸送」)、【送り先】(「送検」)などの空きスロットがある。

最後に概念操作のタイプは、1つの基底 (B) が、事態の展開の指定、否定、複数化などのような概念操作という精緻化 (E) を受けるものである。

- (6) 走り - 始める (B-E)
 読み - かける (B-E)
 完全 - 燃焼 (E-B)
 過剰 - 摂取 (E-B)

概念操作型の複合語は (6) のように、精緻化のプロセスの概念 (E) を「～かける (ある事象の未遂を表す)」や「完全～ (ある事象の完遂を表す)」などの語彙素で表しており、基底と精緻化が構成要素となる。南アジア諸言語 (Masica 1976 を参照) にも、ある基底に対する概念操作を複合動詞で表している例が多く見られ、*explicator compound verb* などの用語で多くの研究が存在する (Hook 1974, 1999, Pardeshi 2001 など)。このタイプの複合動詞は概念操作型の複合語と見なすことで、統一的に説明することが可能となる。

概念操作という意味的な精緻化は多くの場合、屈折や派生という形態的な手段を伴う。たとえ

ば、前述の英語の複数形 *cats* は、意味的にある概念の複数化という概念操作を表しているが、屈折という形態的な手段を用いて表している。また、派生の場合には (7) のように、接辞によって概念操作という精緻化を表している。

- (7) 【否定化】：「非～」, 「不～」
 【反復化】：「再～」
 【複数化】：「～達」, 「～ら」
 【極限】：「超～」
 【完了】：「～済み」, 「～後」
 など

このように、概念操作を表す意味的な精緻化は生産性が高く、接辞によって表されやすいと考えられる。しかし、日本語や南アジア諸言語の複合動詞のように、概念操作という意味的な精緻化は語彙素によっても表すことができる。つまり、概念操作のタイプは屈折、派生、そして複合にまたがるものである。このことは、屈折、派生、複合が明確に分けられるものではなく、連続的なものであることを支持している (Bybee 1985, 影山 1993, Booij 2005, 2006 などを参照)。

本研究は以上のような基底と精緻化に基づく分類法によって、次節より主要部の認定、生起順序の制限、生産性の違いという3つの課題を解決する。

4. 分析

4.1 主要部の認定

主要部という概念は多くの先行研究で取り上げられている (Lieber 1981, Williams 1981, Kiparsky 1982, Selkirk 1982, Zwicky 1985 など)。近年では, Scalise et al. (2009) が主要部の概念を範疇の主要部, 意味の主要部, 文法特性の主要部という3つのパラメータに分けることによって, 世界諸言語の複合語の類型化を提示している。

ここで問題となるのは, 主要部の予測可能性である。どのタイプの複合語がどのような主要部を持つのか, ということについて, 先行研究の分類ではうまく説明できない。それに対し, 基底と精緻化理論に基づく本研究の分類では, それぞれのタイプが異なる主要部を持つ。

本研究の分類において, 複合語の主要部の認定については, 精緻化を受けたあとの構造 (図5の S1 における構造) に基づいて判断することができる。

並列合成型においては, B1 と B2 が同等であるため, 両方とも主要部である。

概念付加型では, 基底 B が付加物 A の土台になっているため, 基底が主要部である。どの構成要素が基底となるのかはスロットの関係によって決まる。たとえば「舞い落ちる」の場合, 「落ちる」という移動の概念には, それが一般的にどのような様態で行われるのか, という関連情報が含まれており, それが空きスロットとなる (陳 2015, 陳・松本 近刊を参照)。反対に, 「舞う」という動作の概念には, 移動に関する関連情報は含まれていない。そのため, 「落ちる」が基底となり, その様態のスロットに「舞う」の表す概念が付加物として埋め込まれるのである。この

場合、順序が付加物－基底となるのは、日本語において、様態などを表す副詞が「ひらひらと落ちる」のように、それが修飾する動詞の前に置かれることによるものと思われる。実際に、同じように副詞が動詞の前に置かれる中国語においても、移動とその様態を表す複合動詞の場合は、「抖動 *dǒu dòng*」(tremble-move) などのように、付加物－基底という語順になる。問題となるのは、「洗い落とす」のような場合である。「洗い落とす」の場合、「洗う」にはそれを行う目的の関連情報があり、「落とす」にもそれを達成する手段の関連情報がある。つまり V1 と V2 両方とも空きスロットを持つということである。この場合、時間順序との類像性 (Matsumoto 1996: 280-281 を参照) により、V2 が目的を表す「落とす」となる (複合動詞ではなく、テ形を用いた場合においても、「洗って落とす」のように、時間順序に従う)。そして、状態変化を表す事象が Talmy (2000: 217) における「枠付け事象 (framing event)」であり、複合事象において中心的な役割を担うコミュニケーション上重要なものであるため、基底となる。そのため、「洗い落とす」は状態変化を表す V2 「落とす」が基底＝主要部となる (例: 汚れを {洗う／落とす})。「折り曲げる (手段－目的の意味関係)」や「崩れ落ちる (原因－結果の意味関係)」のような、V1V2 両方が状態変化を表すものの場合、同じ意味関係に属する「洗い落とす (手段－目的)」や「歩き疲れる (原因－結果)」と一致するように V2 を主要部として取ると考えられる。そのため、概念付加型の複合動詞の語順は付加物－基底となる。

概念操作型においては単一の基底 B が概念操作を受けて、B' となる。そのため、基本的には基底 B を表すものが主要部となる。概念操作タイプの複合動詞の場合、後述するように V1 が基底となるため、(8) のように、主要部は多くの場合 V1 で表される。

- (8) a. フルマラソンを {走り切った／走った／*切った}
 b. 手塚治虫を {語り尽くす／語る／*尽くす}。
 c. 空を {見上げる／見る／*上げる}。

ただし、概念操作型においては、精緻化のあとの概念構造が不可分な 1 つの概念になっている。そのため、概念操作の種類によって、基底の概念と精緻化のあとの概念が大きく異なる場合には、(9) のように、ある部分を意味の中心として認定することは難しい。

- (9) a. お酒を飲みかける ≠ お酒を {飲む／かける}。
 b. プレゼントを渡し損ねた ≠ プレゼントを {渡した／損ねた}。
 c. 名前を聞き忘れた ≠ 名前を {聞いた／忘れた}。

概念操作型の語順が基底－精緻化となっているのは、日本語のような SOV 言語において、ある概念を操作する際は、「走ることを始める」のように「V することを V」と表現するからだと考えられる。概念操作型の複合動詞が多く存在している南アジア諸言語も同様に SOV 型であり、概念操作型の語順が基底－精緻化となっている²。また、3 節で述べたように、基底はすでに確立

² ただし韓国語のように、複合動詞が存在している SOV 言語であっても、概念操作型の複合動詞が少数のものを除き存在しない場合もある (塚本 2013 を参照)。

されたもの、存在するもの、またはコントロール下にあるもので、ある種のプライオリティを有する。精緻化はすでに存在する基底に対して行う操作であるため、心理的なアクセスの順序では基底-精緻化となる。概念操作型の語順はこの順序と類像的な関係にある³。

これまで基底と精緻化理論に基づいて複合動詞の主要部を見てきたが、主要部が存在しない、いわゆる「外心構造」と呼ばれるものも存在している。たとえば、「赤ずきん」という複合語は赤という色を表すものでもなければ、頭巾を表すものでもない。複合動詞においても「取り締まる」のように、取ることで締まることでもないものがある。このような複合語は外心構造を持つものである。外心構造の複合語は、意味的に表したいものが先にあって、それを表現するために形態的な要素を当てはめて表現している。Scalise & Bisetto (2009) では分類の基準の1つとして主要部の有無を挙げているが、本研究の分類はそれを否定するものではなく、主要部の有無という基準を本研究の分類の下位分類として追加することは可能である。

4.2 生起順序の制限

1節で触れたように、日本語複合動詞には「寝-静まり-かえる」のように、特定の生起順序の制限が見られる(例:「*寝-かえり-静まる」)。影山(2013)ではこのような生起順序について、3つの異なるタイプの複合動詞が存在する、という観点から論じている。その3つとは、統語的複合動詞、語彙的アスペクト複合動詞(Lexical-aspect, L-asp)、語彙的主題関係複合動詞である。

(10) a. 統語的複合動詞(影山1993, 2012)

【始動】

「～始める」(歩き始める, 食べ始める など)

「～出す」(動き出す, 歌い出す など)

【継続】

「～続ける」(降り続ける, 書き続ける など)

【完了】

「～終わる」(作り終わる, 話し終わる など)

【未遂】

「～損なう」(行き損なう, 買い損なう など)

など

b. 語彙的アスペクト複合動詞(影山2012, 2013)

【完了】

「～上げる」(縫い上げる, 勤め上げる など)⁴

【継続】

³ Langacker (2016: 418) では、一般的に接頭辞よりも接尾辞のほうが多く用いられている理由について、このような基底のプライオリティを挙げて説明している。

⁴ 「～上げる」については基底に対する概念操作ではなく、目的語が表す対象を〈完成させる〉という意味を表すため、本研究における概念付加型、影山(2012, 2013)における手段-目的主題関係型のものとして考える。

「～しきる」(降りしきる, 鳴きしきる)

【反復】

「～返す」(ほじくり返す, やり返す など)

【複数事象の相互関係】

「～あう」(溶けあう, 示しあう など)

など

c. 語彙的・主題関係複合動詞 (松本 1998 など)

【手段-目的】

「～取る」(奪い取る, 切り取る など)

【原因-結果】

「～疲れる」(歩き疲れる, 読み疲れる など)

【様態-移動】

「～落ちる」(舞い落ちる, 転がり落ちる など)

など

影山 (2012) によると, この3つのタイプは図6のように, 統語的補助動詞より下に語彙的な補助動詞が現れ, さらに下に主題関係複合動詞 (語彙的動詞の組み合わせ) があるという重層構造をなしている。このような重層構造になっているため, 複合動詞に生起順序の制限が見られるのだと説明している。

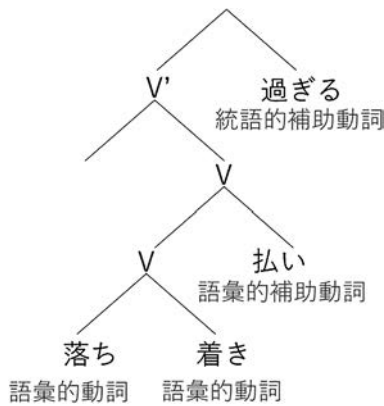


図6 影山 (2012) における日本語複合動詞の重層構造

この中で, 統語的複合動詞とは, 文法的には前項動詞が後項動詞と異なる述語として機能する複合動詞である (Matsumoto 1996)。具体的には, 前項動詞が後項動詞の取る補文構造の主要部となっているものである。統語的複合動詞と語彙的複合動詞の違いについて, 影山 (1993, 2013), Matsumoto (1996) などは, いくつかのテストを用いて両者の違いを明らかにしている。例を挙げると, まず統語的複合動詞は V1 とその項を, 代用形の「そうする」で置き換えること

ができるが、語彙的複合動詞ではそれが不可能である。

(11) a. 語彙的複合動詞

遊び暮らす→*そうし暮らす, 押し開ける→*そうし開ける,
追いかう→*そうしかう, 仕舞い込む→*そうし込む,
見落とす→*そうし落とす, 泣き叫ぶ→*そうし叫ぶ

b. 統語的複合動詞

調べ終える→そうし終える, シャベリまくる→そうしまくる,
食べ過ぎる→そうし過ぎる, 出し忘れる→そうし忘れる

これは、V1が複合語の一部であるにもかかわらず、照応に参加するということである。一般に、「語（複合語を含む）の一部分だけが文中の照応に参加することはできない」という「語彙照応の制約」があるとされるが、統語的複合動詞のV1はある意味で独立した語であることを示している。

また、統語的複合動詞ではV1が形態的に複雑なものでもよいが、語彙的複合動詞ではそれが許されないという指摘もある。たとえば、統語的複合動詞ではV1にサ変動詞が来ることができるが、語彙的複合動詞ではそれが許されない。

(12) サ変動詞

a. 語彙的複合動詞

貼り付ける→*接着し付ける, 跳び越す→*ジャンプし越す,
吸い取る→*吸引し取る, 沸き立つ→*沸騰し立つ

b. 統語的複合動詞

見続ける→見物し続ける, 弱り切る→衰弱し切る,
調べ尽くす→調査し尽くす, 手紙を出し忘れる→投函し忘れる

次に、影山（2012）は語彙的な複合動詞の下位分類として、語彙的主題関係と語彙的アスペクトを区別している。語彙的主題関係の場合は、V1がV2を手段、様態、原因などの意味関係で修飾する。それに対し、語彙的アスペクトの場合、V2は広い意味での語彙的アスペクト（アクションスアルト）を表し、V1が表す事象の展開について述べるものであると述べている。語彙的アスペクトか語彙的主題関係かを区別する方法としては、(13)のような動詞の反復形が可能かどうか、というテストを用いている。

(13) a. 使いに使い込んだバッグ／冴えに冴え渡った（語彙的アスペクト）

b. *ドアを押しに押し開けた／流れに流れ着いた（語彙的主題関係）

影山（2012, 2013）の分類は複合語の重要な特質をとらえたものである。しかし、影山（2012）も述べているように、統語的か語彙的か、という分類は必ずしも部門の違いではない。次節で取り上げる生産性の問題ともかかわってくるが、浅尾（2007）では統語的複合動詞に見られる代用形の置き換えなどの統語的な性質は、構造による違いではなく、生産性が原因であると主張し、

コーパスのデータを用いて実証している。それによると、生産的な複合語は、オンラインで構成的に意味が計算可能なはずであり、代用表現を含む複合語は必ず構成的な計算が必要と考えられるため、生産性の高い場合に代用表現が容認されることは予測される事柄であるという。生産性の極めて高い複合動詞「～始める、～続ける、～過ぎる、～得る」などは、共通してアスペクト・可能・程度などを表しており、前項に現れる動詞の意味カテゴリーをほとんど限定しない。そのため、生産性が高くなり、その結果代用形などのような統語的な性質が生じるのだと主張している。一方、「～合う」「～直す」はV1に対する意味的な制限が多いため、限定的な生産性しかない。そのため、代用形などのような統語的な性質がないのだといえる（語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性については陳劫憐（2013）も参照）。

統語的であるとされている複合動詞が語彙的な性質を持つことも観察される。たとえば、「日本での暮らしが {始まる／終わる}」のように、単独使用のときは開始も終了も言及できるのに対し、複合動詞になると「日本で {暮らし始める／*暮らし終わる}」のように、生活期間の終了を表す「*暮らし終わる」が存在しない。同様に、統語的複合動詞だとされている「見直す」も単に「二度見する」のような〈もう一回見る〉という意味ではなく、〈最初からもう一回見る〉、あるいは〈再検討する〉という限定された意味を表している。このように、統語的複合動詞として考えられてきたものでも、語彙的欠如（lexical gap）や意味的な不透明性といった語彙的な性質を持つ。

さらに重大な問題点として、影山（2013）が同じ語彙的アスペクト複合動詞だとしている「～つける」と「～合う」でも、「切りつけ合う」と「*切り合いつける」というように生起順序の制限が見られる。また、語彙的アスペクト複合動詞と統語的複合動詞の生起順序が果たして一定かどうか、ということについても疑問が残る（本研究ではこの点について、あとで見るようにコーパスを用いて検証する）。さらにいうと、複合動詞以外の複合語の場合にも「複合動詞理論」、「*複合理論動詞」のように生起順序の制限が見られるため、より一貫した説明が求められる。

本研究は複合語の生起順序に関しては、それぞれのB/E構造における異なる制限としてとらえる。

まず、並列合成型においては、B1とB2が同等のものでなければならない。そのため、「抱きかかえ上げる」（下線部は基底を表す）のように、先に並列合成で「抱きかかえる」を形成してから基底の「上げる」に概念付加するのは問題ない。しかし、先に概念付加型の「抱き上げる」を形成すると、単純動詞とは並列合成できなくなるため、「*抱き上げかかえる」が成立しないのである。同様に、先に概念操作型の「泣き始める」を形成すると、「*泣き始め叫ぶ」のように単純動詞と並列合成できなくなる。

次に、概念付加型においては、基底となるものは何らかのスロット（性質を指定できるもの。例：具体物における【色】や【形】、状態変化における【原因】や【手段】など）を持っている必要があり、付加物はそのスロットに適合するものでなければならない。並列合成を受けたもの（たとえば「抱きかかえる」）は概念付加型の付加物として「抱きかかえ上げる」のような複合動詞を形成できるが、概念操作を受けたもの（たとえば「抱き続ける」）は「*抱き続け上げる」の

ように、付加物として複合動詞を形成できない（複合名詞の場合は「連勝記録」のように可能である）。また、並列合成や概念操作を受けたものは、概念的特定性が高くなっているため、日本語複合動詞においては概念付加型の基底にはなれない（複合名詞では「土地売買」, 「開幕連勝」のような例が存在する）。

最後に、概念操作型において基底になるものは、精緻化(E)を受けられるものであればいい(例: 「切り倒し始める」 「完全自動走行」など)。影山(2012, 2013)において統語的複合動詞と語彙的アスペクト複合動詞とされているものは、本研究における概念操作型に相当し、それらは基底に対する制約が最も少ないため、並列合成型や概念付加型の複合動詞とさらに複合することがよく見られる(「飛び跳ね始める」, 「叩き壊しまくる」)。

日本語複合動詞の場合、この3つのタイプは[[[並列合成型]-概念付加型]-概念操作型]という特定の生起順序に従う必要がある。概念付加-並列合成, 概念操作-並列合成, 概念操作-概念付加は全て許されない生起順序である。

いわゆる統語的複合動詞が語彙的アスペクト複合動詞より外側に位置するのは、統語的複合動詞のほうがより多くの概念を概念操作の基底として取ることができるからである。浅尾(2007)が述べているように、このような意味的適用性の高さが統語的複合動詞の生産性の高さをもたらし、その結果、統語的複合動詞といわれるような様々な性質が生じたのだと考えられる。

本研究では統語的複合動詞と語彙的アスペクト複合動詞を2つの異なるタイプとして見るのではなく、同じ概念操作型と見なす。そして、それぞれの動詞の意味的な適合性が異なることから、同じタイプの中に程度差が生じるのだと考える。本研究はこれを実証するために、『国語研日本語ウェブコーパス(NWJC)]を用いる。『国語研日本語ウェブコーパス』はウェブを母集団として100億語規模を目標として構築した日本語コーパスで、検索系「梵天」に格納された形で公開されている。このような超大規模コーパスを用いることで、稀にしか出現しないV1-V2-V3のような言語現象の実態を考察することが可能となる。具体的な研究方法としては、概念操作型として認められる複合動詞の後項を対象に、総トークン数の高い順から(14)の20語を選び、それらがV1-V2_{ASP}-V3_{ASP}(たとえば「愛し-続け_{ASP}-合う_{ASP}」)のように、相互に組み合わせさせた際の結合可能なパターンを「梵天」の品詞列検索で調べた⁵。

- (14) 【相互行為】 合う, 【多回性】 まくる, 【継続】 続ける, 【不可】 かねる, 【可能】 得る,
 【忘却】 忘れる, 【過剰】 過ぎる, 【再試行】 直す, 【習慣】 慣れる,
 【完了】 終える／終わる, 【完遂】 切る／通す／尽くす／抜く, 【開始】 始める／出す,
 【未遂】 かかる／かける, 【極限】 果てる

その結果は以下のものである(表の括弧の中の数字はタイプ頻度を表す)。

⁵ 用例を収録するに当たっては、「キズの舐め合い始める」のように、V1V2が[V-V]_Nの構造である場合、「抱き続け出した答え」のように、V-Vと後続の動詞の間に本来区切りがあるもの、「～の通り切り始める」のように最初の要素と後続のV-Vの間に区切りがあるもの、「車に越えかけ始めた」のような誤字(「越え」→「声」)だと思われるものなど、[V-V-V]_Vではないものを手作業で排除した。

表1 「V1V2_{ASP} 合う」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 合う	
結合できる V2 _{ASP}	
【多回性】	まくる：言いまくり合う，語りまくり合う，感じまくり合う，突きまくり合う，褒めまくり合う (5)
【継続】	続ける：愛し続け合う，繋がり続け合う，語り続け合う，言い続け合う (4)
【完遂】	切る／通す／尽くす／抜く：語り尽くし合う，食べ尽くし合う，知り尽くし合う，絞り尽くし合う (4)
結合できない V2 _{ASP}	
【不可】	かねる，【可能】得る，【忘却】忘れる，【過剰】過ぎる，【再試行】直す，【習慣】慣れる，【完了】終わる／終わる，【開始】始める／出す，【未遂】かかる／かける，【極限】果てる

表2 「V1V2_{ASP} まくる」の結合可能性

V1V2 _{ASP} まくる	
結合できる V2 _{ASP}	
【相互行為】	合う：しゃべり合いまくる，騙し合いまくる，じゃれ合いまくる，撮り合いまくる，引っ張り合いまくる，譲り合いまくる，押し付け合いまくる，見つめ合いまくる等 (11)
【継続】	続ける：吹き続けまくる，煽り続けまくる，吠え続けまくる，撒き続けまくる，叫び続けまくる，運び続けまくる，撮り続けまくる，挑み続けまくる，逃げ続けまくる等 (13)
【不可】	かねる：たまりかねまくる，待ちかねまくる (2)
【忘却】	忘れる：撮り忘れまくる，押し忘れまくる，作り忘れまくる，飲み忘れまくる，買い忘れまくる，載せ忘れまくる，片付け忘れまくる，書き忘れまくる，聞き忘れまくる等 (13)
【過剰】	過ぎる：疲れ過ぎまくる，飲み過ぎまくる (2)
【再試行】	直す：聴き直しまくる，書き直しまくる，投げ直しまくる，いじり直しまくる，並び直しまくる，録り直しまくる，見つめ直しまくる，撮り直しまくる，入れ直しまくる等 (14)
【習慣】	慣れる：使い慣れまくる (1)
【完遂】	切る／通す／尽くす／抜く：逃げ切りまくる，使い切りまくる，舐め切りまくる，知り尽くしまくる，言い尽くしまくる，食べ尽くしまくる，守り抜きまくる等 (10)
【開始】	始める／出す：動き出しまくる，萌え出しまくる，泣き出しまくる (3)
【未遂】	かかる／かける：溺れかけまくる，死にかけまくる (2)
【極限】	果てる：朽ち果てまくる，疲れ果てまくる，呆れ果てまくる (3)
結合できない V2 _{ASP}	
【可能】	得る，【完了】 終わる／終わる

表3 「V1V2_{ASP} 続ける」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 続ける	
結合できる V2 _{ASP}	
【相互行為】	合う：傷つけ合い続ける，煽り合い続ける，避け合い続ける，見つめ合い続ける，想い合い続ける，じゃれ合い続ける，呼び合い続ける，潰し合い続ける等 (22)
【多回性】	まくる：叩きまくり続ける，暴れまくり続ける，吹きまくり続ける，狩りまくり続ける，吸いまくり続ける，越えまくり続ける，騒ぎまくり続ける，誘いまくり続ける等 (34)
【不可】	かねる：図りかね続ける (1)
【忘却】	忘れる：伝え忘れ続ける，飲み忘れ続ける，貼り忘れ続ける，買い忘れ続ける，言い忘れ続ける，剃り忘れ続ける，書き忘れ続ける，入れ忘れ続ける，閉め忘れ続ける等 (14)
【過剰】	過ぎる：食べ過ぎ続ける，合わせ過ぎ続ける，踏み過ぎ続ける (3)

【再試行】直す：取り組み直し続ける、聴き直し続ける、拾い直し続ける、解き直し続ける、惚れ直し続ける、紡ぎ直し続ける、結び直し続ける、貼り直し続ける等 (18)
【完遂】切る／通す／尽くす／抜く：売り切り続ける、守り通し続ける、隠し通し続ける、つき通し続ける、喋り通し続ける、覆い尽くし続ける、耐え抜き続ける、守り抜き続ける等 (17)
【開始】始める／出す：落ち込み始め続ける、歩き始め続ける、とり始め続ける、走り始め続ける、輝き出し続ける、こだわり出し続ける (6)
【未遂】かかる／かける：落ちかけ続ける (1)
結合できない V2 _{ASP}
【可能】得る、【習慣】慣れる、【完了】終える／終わる、【極限】果てる

表4 「V1V2_{ASP}かねる」の結合可能性

V1V2 _{ASP} かねる
結合できる V2 _{ASP}
【相互行為】合う：取っ組み合いかねる (1)
【多回性】まくる：たまりまくるかねる、書きまくるかねる、とりまくるかねる、届きまくるかねる (4)
【継続】続ける：飲み続けかねる、言い続けかねる、喋り続けかねる、遊び続けかねる、負け続けかねる、使い続けかねる、与え続けかねる、住み続けかねる、持ち続けかねる等 (13)
【可能】得る：なり得かねる、有り得かねる、与え得かねる (3)
【忘却】忘れる：受け取り忘れかねる、入れ忘れかねる、閉め忘れかねる、読み忘れかねる (4)
【過剰】過ぎる：与え過ぎかねる、飲み過ぎかねる (2)
【完遂】切る／通す／尽くす／抜く：使い切りかねる、耐え切りかねる、食い尽くしかねる、埋め尽くしかねる、読み尽くしかねる、覆い尽くしかねる、焼き尽くしかねる等 (12)
【開始】始める／出す：ぐらつき始めかねる、書き始めかねる、言い始めかねる、言い出しかねる、降り出しかねる、暴れ出しかねる、泣き出しかねる、騒ぎ出しかねる等 (41)
【未遂】かかる／かける：いきかけかねる (1)
結合できない V2 _{ASP}
【再試行】直す、【習慣】慣れる、【完了】終える／終わる、【極限】果てる

表5 「V1V2_{ASP}得る」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 得る
結合できる V2 _{ASP}
【相互行為】合う：理解し合い得る、刺激し合い得る (2)
【継続】続ける：与え続け得る、持ち続け得る、耐え続け得る、増やし続け得る、守り続け得る、使い続け得る、待ち続け得る、売れ続け得る、働き続け得る、保ち続け得る等 (45)
【不可】かねる：据えかね得る、なりかね得る (2)
【忘却】忘れる：予約し忘れ得る、投票し忘れ得る、作り忘れ得る (3)
【過剰】過ぎる：なり過ぎ得る (1)
【再試行】直す：とらえ直し得る、問い直し得る、建て直し得る (3)
【完遂】切る／通す／尽くす／抜く：読み通し得る、汲み尽くし得る、記述し尽くし得る、表現し尽くし得る、言い尽くし得る、論じ尽くし得る、食い尽くし得る、説き尽くし得る等 (14)
【開始】始める／出す：示し始め得る、有し始め得る、溶解し始め得る、見え始め得る、成長し始め得る、向け始め得る、思い始め得る、建設し始め得る、妨げ始め得る等 (18)
結合できない V2 _{ASP}

【多回性】まくる, 【習慣】慣れる, 【完了】終える／終わる, 【未遂】かかる／かける, 【極限】果てる

表6 「V1V2_{ASP} 忘れる」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 忘れる
結合できる V2 _{ASP}
【再試行】直す: 貼り直し忘れる, 丸め直し忘れる, かけ直し忘れる, 設定し直し忘れる, 挿し直し忘れる, リンクし直し忘れる (6)
結合できない V2 _{ASP}
【相互行為】合う, 【多回性】まくる, 【継続】続ける, 【不可】かねる, 【可能】得る, 【過剰】過ぎる, 【習慣】慣れる, 【完了】終える／終わる, 【完遂】切る／通す／尽くす／抜く, 【開始】始める／出す, 【未遂】かかる／かける, 【極限】果てる

表7 「V1V2_{ASP} 過ぎる」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 過ぎる
結合できる V2 _{ASP}
【相互行為】合う: じゃれ合い過ぎる, 褒め合い過ぎる, 傷付け合い過ぎる, 見つめ合い過ぎる, 分かり合い過ぎる, 主張し合い過ぎる, 共感し合い過ぎる, 荒し合い過ぎる等 (21)
【多回性】まくる: 求めまくり過ぎる, 変わりまくり過ぎる, 撃ちまくり過ぎる, 弾きまくり過ぎる, 嘔みまくり過ぎる, 喋りまくり過ぎる, 言いまくり過ぎる等 (14)
【継続】続ける: 食べ続け過ぎる, 喋り続け過ぎる, 主張し続け過ぎる, 走り続け過ぎる, もらい続け過ぎる, 維持し続け過ぎる, 居座り続け過ぎる, 持ち続け過ぎる等 (52)
【不可】かねる: 待ちかね過ぎる, 測りかね過ぎる, 分かりかね過ぎる (3)
【可能】得る: あり得過ぎる (1)
【忘却】忘れる: 受け取り忘れ過ぎる, 撮り忘れ過ぎる, 言い忘れ過ぎる, 書き忘れ過ぎる, メモし忘れ過ぎる, 付け忘れ過ぎる, 出し忘れ過ぎる, 入れ忘れ過ぎる (8)
【再試行】直す: 固め直し過ぎる, 振り直し過ぎる, 加工し直し過ぎる, 見つめ直し過ぎる, 惚れ直し過ぎる, かけ直し過ぎる, 貼り直し過ぎる, 挿し直し過ぎる, 編み直し過ぎる (9)
【習慣】慣れる: 見慣れ過ぎる, 聞き慣れ過ぎる, 使い慣れ過ぎる, 泊まり慣れ過ぎる, やり慣れ過ぎる, 嗅ぎ慣れ過ぎる, 歌い慣れ過ぎる, 作り慣れ過ぎる, 住み慣れ過ぎる等 (30)
【完了】終える／終わる: 読み終わり過ぎる (1)
【完遂】切る／通す／尽くす／抜く: 出し切り過ぎる, 頼り切り過ぎる, 分かり切り過ぎる, なり切り過ぎる, 絞り切り過ぎる, 浸り切り過ぎる, 伸び切り過ぎる, 知り尽くし過ぎる, 遊び尽くし過ぎる, やり尽くし過ぎる, 鍛え抜き過ぎる, 考え抜き過ぎる等 (31)
【開始】始める／出す: 書き始め過ぎる, 歩き始め過ぎる, 咲き始め過ぎる, 読み始め過ぎる, 作り始め過ぎる, 数え始め過ぎる, 気にし始め過ぎる, 作用し始め過ぎる, やり始め過ぎる, 動き始め過ぎる (10)
【未遂】かかる／かける: 壊れかけ過ぎる, 死にかけ過ぎる (2)
【極限】果てる: 荒れ果て過ぎる, 朽ち果て過ぎる, 疲れ果て過ぎる, 尽き果て過ぎる, 変わり果て過ぎる, 呆れ果て過ぎる (6)
結合できない V2 _{ASP}
なし

表8 「V1V2_{ASP} 直す」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 直す
結合できる V2 _{ASP}

【相互行為】 合う：見つめ合い直す (1)
【継続】 続ける：生き続け直す (1)
【完遂】 切る／通す／尽くす／抜く：埋め尽くし直す (1)
【開始】 始める／出す：書き始め直す (1)
結合できない V2 _{ASP}
【多回性】 まくる，【不可】 かねる，【可能】 得る，【忘却】 忘れる，【過剰】 過ぎる，【習慣】 慣れる，【完了】 終わる／終わる，【未遂】 かかる／かける，【極限】 果てる

表9 「V1V2_{ASP} 慣れる」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 慣れる
結合できる V2 _{ASP}
【多回性】 まくる：押しまくり慣れる (1)
【再試行】 直す：かけ直し慣れる (1)
【開始】 始める／出す：行き始め慣れる，使い始め慣れる，飼い始め慣れる，やり始め慣れる，使い出し慣れる，通い出し慣れる (6)
【未遂】 かかる／かける：攀りかけ慣れる (1)
結合できない V2 _{ASP}
【相互行為】 合う，【継続】 続ける，【不可】 かねる，【可能】 得る，【忘却】 忘れる，【過剰】 過ぎる，【完了】 終わる／終わる，【完遂】 切る／通す／尽くす／抜く，【極限】 果てる

表10 「V1V2_{ASP} 終わる／終わる」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 終わる／終わる
結合できる V2 _{ASP}
【多回性】 まくる：焼きまくり終わる (1)
【継続】 続ける：冷やし続け終わる (1)
【再試行】 直す：振り直し終わる，履き直し終わる，かけ直し終わる，設置し直し終わる，録り直し終わる，留め直し終わる，立て直し終わる，振り直し終わる，入れ直し終わる等 (16)
【完遂】 切る／通す／尽くす／抜く：使い切り終わる，出し切り終わる，鳴り切り終わる，読み通し終わる，喰らい尽くし終わる，焼き尽くし終わる (6)
【極限】 果てる：疲れ果て終わる (1)
結合できない V2 _{ASP}
【相互行為】 合う，【不可】 かねる，【可能】 得る，【忘却】 忘れる，【過剰】 過ぎる，【習慣】 慣れる，【開始】 始める／出す，【未遂】 かかる／かける

表11 「V1V2_{ASP} 切る／通す／尽くす／抜く」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 切る／通す／尽くす／抜く
結合できる V2 _{ASP}
【多回性】 まくる：解決しまくり尽くす (1)
【継続】 続ける：寝続け切る，使い続け切る，防ぎ続き切る，選択し続け通す (4)
【忘却】 忘れる：言い忘れ切る，かり忘れ切る (2)
【再試行】 直す：立ち直し切る，振り直し切る，見つめ直し切る (3)
【習慣】 慣れる：見慣れ切る，聞き慣れ切る，死に慣れ切る (3)

【完了】 終える／終わる：読み終え切る (1)
【極限】 果てる：朽ち果て切る (1)
結合できない V2 _{ASP}
【相互行為】 合う, 【不可】 かねる, 【可能】 得る, 【過剰】 過ぎる, 【開始】 始める／出す, 【未遂】 かかる／かける

表 12 「V1V2_{ASP} 始める／出す」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 始める／出す
結合できる V2 _{ASP}
【相互行為】 合う：じゃれ合い始める, 付き合い始める, なすりつけ合い始める, 投げ合い始める, うなり合い始める, 貶し合い始める, 潰し合い始める, 褒め合い出す等 (47)
【多回性】 まくる：売れまくり始める, 責めまくり始める, 揺れまくり始める, 使いまくり始める, 吠えまくり始める, 撮りまくり始める, 借りまくり始める, 言いまくり始める, 遊びまくり始める, 打ちまくり始める, 出まくり出す, 見まくり出す, 泣きまくり出す等 (109)
【継続】 続ける：叫び続け始める, 出続け始める, 探し続け始める, 見続け始める, 書き続け始める, 下がり続け始める, 歩き続け出す, 行き続け出す, 回り続け出す等 (33)
【不可】 かねる：耐えかね始める, 飛びかね始める, 成りかね始める (3)
【忘却】 忘れる：撮り忘れ始める, 付け忘れ始める, し忘れ出す, 報告し忘れ出す (4)
【過剰】 過ぎる：食べ過ぎ始める, 目立ち過ぎ始める, 当たり過ぎ始める, 露出し過ぎ出す (4)
【再試行】 直す：見つめ直し始める, 検討し直し始める, 数え直し始める, 付き直し始める, 詰め直し始める, 覚え直し始める, 食べ直し始める, 買い直し始める, 鍛え直し始める等 (50)
【習慣】 慣れる：使い慣れ始める, 歌い慣れ始める, 住み慣れ始める, 見慣れ始める, 食べ慣れ始める, 書き慣れ始める, 聞き慣れ始める, 飲み慣れ始める, 言い慣れ始める, 着慣れ始める, やり慣れ始める, 通い慣れ始める, 聞き慣れ出す, 使い慣れ出す, 見慣れ出す等 (16)
【完了】 終える／終わる：書き終え出す, 作り終わり始める, 咲き終わり始める, 食べ終わり始める, 食い終わり始める, 読み終わり始める, 読み終わり出す, 食べ終わり出す (8)
【完遂】 切る／通す／尽くす／抜く：売り切り始める, 使い切り始める, 埋め尽くし始める, 焼き尽くし始める, 出尽くし始める, 覆い尽くし始める, 燃やし尽くし始める等 (19)
【未遂】 かかる／かける：切れかかり始める, 消えかかり始める, なりかかり始める, いかれかけ始める, 壊れかけ始める, 諦めかけ始める, 寝かけ始める, はまりかけ始める等 (35)
【極限】 果てる：朽ち果て始める, 疲れ果て始める, 荒れ果て始める, 朽ち果て出す (4)
結合できない V2 _{ASP}
【可能】 得る

表 13 「V1V2_{ASP} かかる／かける」の結合可能性

V1V2 _{ASP} かかる／かける
結合できる V2 _{ASP}
【相互行為】 合う：やり合いかける (1)
【多回性】 まくる：いきまくりかける, 引きまくりかける (2)
【不可】 かねる：招きかねかける, 耐えかねかける (2)
【忘却】 忘れる：言い忘れかける, 書き忘れかける, 載せ忘れかける, 剃り忘れかける, 降り忘れかける, 撮り忘れかける, 置き忘れかける, 買い忘れかける (8)
【過剰】 過ぎる：行き過ぎかける, 熟れ過ぎかける (2)
【再試行】 直す：惚れ直しかける, 入れ直しかける, 書き直しかける (3)

【習慣】慣れる：使い慣れかける，し慣れかける (2)
【完了】終える／終わる：食べ終わりがかる，喰い終わりがかる，食べ終えかける，書き終えかける，見終えかける，読み終えかける，乾き終えかける，渡り終えかける等 (10)
【完遂】切る／通す／尽くす／抜く：出尽くしかかる，使い切りかける，逃げ切りかける，出尽くしかける，言い尽くしかける，埋め尽くしかける (6)
【開始】始める／出す：なり始めかかる，動き始めかかる，竦み始めかける，動き始めかける，蹴り始めかける，なり始めかける，泣き出しかける，歩き出しかける，走り出しかける等 (29)
【極限】果てる：朽ち果てかかる，疲れ果てかかる，尽き果てかかる，朽ち果てかける，尽き果てかける，荒れ果てかける (6)
結合できない V2 _{ASP}
【継続】続ける，【可能】得る

表 14 「V1V2_{ASP} 果てる」の結合可能性

V1V2 _{ASP} 果てる
結合できる V2 _{ASP}
【完遂】切る／通す／尽くす／抜く：腐り切り果てる，味わい尽くし果てる (2)
結合できない V2 _{ASP}
【相互行為】合う，【多回性】まくる，【継続】続ける，【不可】かねる，【可能】得る，【忘却】忘れる，【過剰】過ぎる，【再試行】直す，【習慣】慣れる，【完了】終える／終わる，【開始】始める／出す，【未遂】かかる／かける

以上の結果をまとめると，表 15 のようになる。

表 15 V1V2_{ASP}V3_{ASP} の結合可能性

V2	V3	忘却	極限	相互行為	再試行	習慣	完了	完遂	可能	継続	不可	多回性	開始	未遂	過剰
忘却								○	○	○	○	○	○	○	○
極限							○	○				○	○	○	○
相互行為				○					○	○	○	○	○	○	○
再試行	○					○	○	○	○	○		○	○	○	○
習慣								○				○	○	○	○
完了								○					○	○	○
完遂			○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
可能											○				○
継続				○	○		○	○	○	○	○	○	○		○
不可									○	○	○	○	○	○	○
多回性				○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
開始					○	○			○	○	○	○	○	○	○
未遂						○				○	○	○	○	○	○
過剰									○	○	○	○	○	○	○

この結果を見ると，語彙的アスペクト複合動詞だとされている「～合う」と統語的複合動詞とされている「～続ける」は，「じゃれ合い続ける」，「呼び合い続ける」，「想い合い続ける」などのように，影山（2012, 2013）が主張しているような生起順序に従うものもあるが，「愛し続け合う」，「繋がり続け合う」，「語り続け合う」，「言い続け合う」のように，統語的－語彙的という生起順序になっているものもある。「言いまくり合う」，「語りまくり合う」，「感しまくり合う」，「突

きまくり合う」, 「褒めまくり合う」も同様に統語的-語彙的という生起順序になっている。

また, 同じ統語的複合動詞に属するものでも特定の生起順序に従う場合がある。たとえば, 「付け忘れ始める (*付け始め忘れる)」, 「埋め尽くしかける (*埋めかけ尽くす)」, 「頼り切り過ぎる (*頼り過ぎ切る)」などがそうである。ただし, 概念操作型の生起順序は絶対的なものではなく, 概念同士の相対的な相性によって決まるものである。たとえば, 「食べ過ぎ続ける」と「食べ続け過ぎる」, 「泣き出しまくる」と「泣きまくり出す」はV2とV3が入れ替え可能である。

このような概念の操作を表すものの相互結合可能性は従来の研究では注目されてこなかったことだが, 本研究は超大規模コーパスを用いることによって明らかにすることができた。

4.3 生産性の違い

4.2で述べたように, 浅尾(2007)は日本語複合動詞に生産性の違いがあることを実証的に示した。ただ, 浅尾(2007)では特に複合動詞のタイプ分けをしていない。その研究方法は、『CD-毎日新聞'95データ集』の本文を用い, 形態素解析を行ったうえで, 各後項ごとに生産性の計算を行うというものであり, トークン数の高いもの(1000例以上のもの)を生産性の高い順に24語挙げて分析している。

本研究では複合語の生産性についても, B/E構造による分類から説明できると考える。つまり, 概念の構造的な違いによって, 生産性に差が出るということである。まず, 並列合成型は同等の2つの概念でなければ複合語になれないため, 生産性は極めて低いことが予測される。次に, 概念付加型はスロットによって意味制限が課せられるが, 意味的に適合するものなら複合語として成立する。そのため, 「～開ける」のような生産性の低いものから, 「～もの」のような非常に生産的なものまでであると考えられる。最後に, 概念操作型は精緻化(E)を受けられるものであればいいため, 生産性が高いものが多いことが予想される。本研究は実証的な手法でこのような仮説を検証する。

生産性を検討する場合, 名詞を含む複合語は膨大な量がある。そのため, データ収集の可能性を考慮して, 本研究は『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』のデータに基づき, 日本語の複合動詞の頻度情報を収集する。各タイプごとにトークン頻度の高い順に20ずつの後項動詞「～V2」を収集する。そして, 収集した頻度情報をもとに, 浅尾(2007)と同様にBaayen(1992)の生産性*P*の概念を分析に用いる。Baayenの生産性*P*とは, ある後項を持つ語の総トークン数を*N*, そのうちただ一度だけ出現した語(hapax legomena)の数を*n*1として, $n1/N$ という式で求められるものである。このようなコーパスに基づく分析で得られた結果を次の表16～18で示す。

表 16 並列合成型複合動詞の生産性⁶

後項動詞	総トークン数 N	一度だけ出現した語の数 n1	例	生産性 P
～まとう (付きまとう)	539	0	なし	0
～響く (鳴り響く)	373	0	なし	0
～茂る (生い茂る)	252	0	なし	0
～求める (探し求める)	240	0	なし	0
～抱える (抱き抱える)	239	0	なし	0
～叫ぶ (泣き叫ぶ)	226	0	なし	0
～望む (待ち望む)	225	0	なし	0
～輝く (光り輝く)	215	0	なし	0
～こたえる (持ちこたえる)	203	0	なし	0
～建つ (そびえ建つ)	200	0	なし	0
～跳ねる (飛び跳ねる)	174	0	なし	0
～立つ (そそり立つ)	124	0	なし	0
～嫌う (忌み嫌う)	106	0	なし	0
～わめく (泣きわめく)	104	0	なし	0
～悲しむ (嘆き悲しむ)	92	0	なし	0
～従う (付き従う)	90	0	なし	0
～見る (覗き見る)	82	0	なし	0
～おののく (恐れおののく)	67	0	なし	0
～たぎる (煮えたぎる)	61	0	なし	0
～食う (貪り食う)	43	0	なし	0
				平均 0

表 17 概念付加型複合動詞の生産性

後項動詞	総トークン数 N	一度だけ出現した語の数 n1	例	生産性 P
～こむ	64293	6	折れ込む, えぐり込む等	0.00009332
～出す	56735	3	こし出す, 煎じ出す等	0.00005287
～上げる	38717	3	挟み上げる, さすりあげる等	0.00007748
～つける	33861	2	止め付ける, 吸い付ける	0.00005906
～かける	24213	1	注ぎかける	0.00004130
～つく	22587	1	吠えつく	0.00004427
～上がる	18407	3	塗り上がる, 磨き上がる等	0.00016298
～取る	17303	1	貪り取る	0.00005779
～入れる	12246	3	こし入れる, 搦い入れる等	0.00024497
～合わせる	9180	1	入れ合わせる	0.00010893

⁶ この中の「～立つ」などはほかにも「飛び立つ」などがあるが、並列関係型ではないため、この表には含まれない。

～立てる	6756	0	なし	0
～立つ	6024	0	なし	0
～出る	5635	0	なし	0
～かかる	5594	1	打ちかかる	0.00017876
～回る	4123	2	探り回る, 叫び回る	0.00048508
～去る	3913	1	背き去る	0.00025555
～回す	3856	0	なし	0
～分ける	3113	3	歌い分ける, 着分ける 等	0.00096370
～落ちる	2432	1	溶け落ちる	0.00041118
～落とす	2335	0	なし	0
				平均 0.00016

表 18 概念操作型複合動詞の生産性

後項動詞	総トークン数 N	一度だけ出現した語の数 n1	例	生産性 P
～合う	21191	352	怒り合う, 渡し合う 等	0.01661082
～始める	18077	950	預け始める, 飢え始める 等	0.05255296
～得る	13712	547	合わせ得る, 助け得る 等	0.03989206
～続ける	13415	721	這い続ける, 閉じ続ける 等	0.05374580
～出す	12529	408	痛み出す, 急ぎ出す 等	0.03256445
～直す	8398	227	拭き直す, 売り直す 等	0.02703024
～切る	8378	359	崩れ切る, 収め切る 等	0.04285032
～過ぎる	7511	489	願い過ぎる, 飽き過ぎる 等	0.06510451
～かねる	3422	285	払いかねる, 座りかねる 等	0.08328462
～かける	2614	343	割れかける, 失いかける 等	0.13121652
～尽くす	2134	107	貼り尽くす, 歌い尽くす 等	0.05014058
～終わる	1887	183	包み終わる, 叩き終わる 等	0.09697933
～まくる	1805	253	伸びまくる, 倒れまくる 等	0.14016620
～抜く	1333	64	恨み抜く, 口説き抜く 等	0.04801200
～終わる	1159	125	流し終わる, 返し終わる 等	0.10785159
～果てる	1054	40	乾き果てる, 廃れ果てる 等	0.03795066
～慣れる	1041	23	歌い慣れる, 漕ぎ慣れる 等	0.02209414
～かかる	868	121	傾きかかる, 暮れかかる 等	0.13940092
～忘れる	764	75	寝忘れる, 塗り忘れる 等	0.09816753
～通す	516	52	通い通す, 働き通す 等	0.10077519
				平均 0.06931

以上のように、本研究の仮説の通り、並列合成型はまったく生産性がないのに対し、概念付加型はかなり低いながらも生産性がないわけではない ($P = 0.00016$)。そして、概念操作型は比較的高い生産性 ($P = 0.06931$) を有することがわかった。複合動詞に見られるこのような生産性の違いは、本研究の分類法の妥当性を裏付けるものである。

5. 結論と今後の課題

本研究では基底と精緻化理論に基づいて、複合語の新たな分類基準を提案した。まとめとして、本研究の分類と先行研究との比較を表 19 に示す。

表 19 本研究の分類と先行研究の分類との比較

本研究の分類	Scalise & Bisetto (2009) の分類	影山 (2012, 2013) の分類
並列合成型	並列型	語彙的主題関係
概念付加型	従属型, 修飾型	語彙的主題関係
概念操作型	該当なし	語彙的アスペクト, 統語的

基底と精緻化理論に基づく分類法によって、主要部の違いは B/E 構造のタイプの違いとしてとらえられ、そして、生起順序の制限は B/E 構造間の結合可能性としてとらえられることを示した。また、生産性の違いについても、B/E 構造における概念の構造的な違いから説明できることを明らかにした。

本研究では日本語 V-V 型複合動詞を例に検討を行ったが、この分類法は複合語全般に適用されるものである。したがって、N-V 型の複合動詞や V-N 型、N-N 型の複合名詞などについてもさらに分析を進める必要がある。

また、本研究が提案した複合語の分類法は日本語だけに当てはまるものではなく、言語一般のものだと考えられる。そのため、今後の課題としては通言語学的な分析を進め、この分類法がほかの言語の複合語にも適用できるかどうかを見る必要がある。

参考文献

- 浅尾仁彦 (2007) 「複合語の生産性と文法的性質」『日本言語学会第 134 回大会予稿集』416-421.
- Baayen, Harald (1992) Quantitative aspects of morphological productivity. In: Geert Booij and Jaap van Marle (eds.) *Yearbook of morphology 1991*, 109-149. Dordrecht: Kluwer.
- Bauer, Laurie (2001) Compounding. In: Martin Haspelmath, König Ekkehard, Oesterreicher Wulf, and Raible Wolfgang (eds.) *Language typology and language universals*, 695-707. Berlin: De Gruyter.
- Bauer, Laurie (2003) *Introducing linguistic morphology*. 2nd edition. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Booij, Geert (2005) Compounding and derivation: Evidence for construction morphology. In: Wolfgang U. Dressler, Franz Rainer, Dieter Kastovsky, and Oskar Pfeiffer (eds.) *Morphology and its demarcations*, 109-132. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Booij, Geert (2006) Inflection and derivation. In: Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of language and linguistics*, 2nd edition, 654-666. Oxford UK: Elsevier.
- Bybee, Joan (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- 陳劫憚 (2013) 「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について—「～出す」を対象として—」影山太郎 (編) (2013), 47-74.
- 陳奕廷 (2015) 「日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズムについて—中国語との比較対照と合わせて—」博士論文, 神戸大学.
- 陳奕廷・松本曜 (近刊) 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系』東京: ひつじ書房.
- Haspelmath, Martin (2002) *Understanding morphology*. London: Arnold.
- Hockett, Charles F. (1954) Two models of grammatical description. *Word* 10: 210-234.
- Hook, Peter (1974) *The compound verb in Hindi*. Ann Arbor: Center for South & Southeast Asian Studies, University of Michigan.
- Hook, Peter (1999) Where do compound verbs come from? (And where are they going?). *Working papers of International*

- Symposium on South Asian Languages: Contact, convergence and typology*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 影山太郎 (1989) 「形態論・語形成論」崎山理 (編) 『言語学要説 (講座日本語と日本教育 第 11 巻)』60–92. 東京: 明治書院.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (2012) 「動詞+動詞型複合動詞研究の現状」研究発表会ハンドアウト (2012 年 9 月 24 日, 東北大学文学研究科国語学研究室共催, 国立国語研究所「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」共同研究発表会, 複合動詞特集).
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系」影山太郎 (編) (2013), 3–49.
- 影山太郎 (編) (2013) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』東京: ひつじ書房.
- Kiparsky, Paul (1982) Lexical phonology and morphology. In: Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the morning calm*, 3–91. Seoul: Hanshin.
- Langacker, Ronald W. (2015) Baseline and elaboration. Handout of Plenary lecture. International Cognitive Linguistics Conference. Northumbria University. July 24, 2015.
- Langacker, Ronald W. (2016) Baseline and elaboration. *Cognitive Linguistics* 27(3): 405–439.
- Lieber, Rochelle (1981) *On the organization of the lexicon*. Indiana: Indiana University Linguistics Club [reprinted 1991: New York: Garland]
- Masica, Colin (1976) *Defining a linguistics area*. Chicago: University of Chicago Press.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex predicates in Japanese: A syntactic and semantic study of the notion 'Word'*. Stanford: CSLI Publications and Tokyo: Kuroshio Publishers.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37–83.
- McCarthy, John (1981) A prosodic theory of nonconcatenative morphology. *Linguistic Inquiry* 12: 373–418.
- Pardeshi, Prashant (2001) The explicator compound verb in Marathi: Definitional issues and criteria for identification. *Kobe Papers in Linguistics* 3: 94–111.
- Sapir, Edward (1921) *Language*. New York: Harcourt, Brace and World.
- Scalise, Sergio and Antonietta Bisetto (2009) The classification of compounds. In: Rochelle Lieber and Pavol Stekauer (eds.) *The Oxford handbook of compounding*, 34–53. Oxford: Oxford University Press.
- Scalise, Sergio, Antonio Fabregas and Francesca Forza (2009) Exocentricity in compounding. *Gengo Kenkyu* 135: 49–84.
- Selkirk, Elizabeth (1982) *The syntax of words*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Spencer, Andrew (1991) *Morphological theory: An introduction to word structure in generative grammar*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Spencer, Andrew (1998) Morphophonological operations. In: Andrew Spencer and Arnold Zwicky (eds.) *Handbook of morphology*, 123–143. Oxford: Blackwell.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 塚本秀樹 (2013) 「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立・不成立とその様相—新影山説に基づく考察—」影山太郎 (編) (2013), 301–330.
- Williams, Edwin (1981) On the notions 'lexically related' and 'head of a word'. *Linguistic Inquiry* 12: 245–274.
- Zwicky, Arnold (1985) Heads. *Journal of Linguistics* 21: 1–29.

関連 Web サイト

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ (2016 年 12 月 15 日確認)

国立国語研究所『国語研日本語ウェブコーパス』http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc/ (2016 年 12 月 15 日確認)

The Classification of Compounds in Baseline/Elaboration Theory: Focusing on Japanese Compound Verbs

CHEN Yi-Ting

Postdoctoral Research Fellow, Theory & Typology Division, Research Department, NINJAL

Abstract

The present paper proposes a new classification of compounds based on baseline/elaboration theory (Langacker 2016). According to the types of elaboration in the semantic pole, this paper classifies compounds into three types: (i) coordination, (ii) augmentation, and (iii) adaptation. By this classification, we can explain the headedness, the differences in productivity, and the restriction on the ordering of Japanese [V1-V2]_v compound verbs (henceforth JCVs).

In baseline/elaboration theory, the head of a compound can be considered as the baseline (B). Coordination is the combination of two words with similar meanings. The components of coordination compounds are equally substantive and constitute a dual baseline. Thus, both V1 and V2 are heads. In augmentation, the baseline is the head V2, and V1 is the slot filler (Additive) of V2. In adaptation, V2 is an adaptation relating B (V1 = head) to a higher-level structure B'. The restriction on the ordering of JCVs can be considered as the result of different constraints for each type. With a focus on adaptation type, this paper clarifies the possibility of mutual coupling between the concepts by utilizing a ten-billion-word scale Japanese web corpus named “NINJAL Web Japanese Corpus.”

Regarding the productivity of JCVs, this paper examined the data in “The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ)” corpus and calculated their productivity. The result shows that type i has zero productivity, type ii has low productivity, and type iii has relatively high productivity. These characteristics of JCVs can be correctly predicted and adequately accounted for by the classification based on baseline/elaboration theory.

Key words: Japanese compound verbs, baseline and elaboration, headedness, ordering restriction, productivity